目　　次

まえがき ……八木　晃介

自分流のカタチ ……河野　秀忠（1）

福祉を学ぶ心構え ……牧口　一二（40）

あとがき ……林　　信明

ま　え　が　き

新入生のみなさんのご入学をお祝いし、心から歓迎いたします。

入学式での西村惠信学長のお話にありましたように、本学は、人権問題の研究・教育の推進を「学是」に設定している非常にユニークな大学です。新入生オリエンテーションの重要な一コマとして人権講演会を設定しているのも、また、ＣＤＣ（キャリア・デベロップメント・センター）の基礎科目に「人権」（前期・後期各８コマ）を準備して、２コマ４単位を必修化しているのも、あまり他に類例のない取り組みだと思います。

このように、本学が反差別と人権尊重を教学の支柱に据えていることは事実でありますが、残念ながら、現時点においてはまだまだタテマエの水準にとどまっているといわざるをえません。私どもは、このタテマエを少しずつホンネの領域に移行させるべく努力を傾注しているつもりですが、これからはみなさんにもこの取り組みに参加していただかねばなりません。今日はまずその最初の第一歩ということになります。

今回は、この国の障害者解放運動と障害者文化運動を長期にわたってリードしてこられた河野秀忠さんと牧口一二さんのお二人からお話をうかがうことになりました。河野さんには本学非常勤講師としてお世話になっておりますし、牧口さんには以前、本学人権週間でご講演いただいたこともあります。お二人のお話から、みなさんは必ずや、人権問題を考えて反差別を生きることは楽しいことなのだ、という実感をおもちになるであろうと確信いたします。

２００４年4月4日

花園大学人権教育研究委員会委員長・人権教育研究センター所長（文学部教授）

八　木　　晃　介

自分流のカタチ

河　野　　秀　忠

（障害者問題情報誌『そよ風のように街にでよう』編集長・花園大学講師）

●大学とはナニか、個からの旅立ち

ご紹介いただきました河野です。研究者ではありません。障害者市民の運動とか、福祉のジャンルとか、情報・映像を実際にやっている立場で大学に勤めております。４月は、人が別れたり、出会ったりする季節です。皆さんも新しい出会いや別れがあろうかと思いますが、花園大学に入学されたことに、おめでとうと申し上げたいと思います。

僕は、この大学に来て今年で３年目になります。でも、皆さんのように、高校を卒業して大学の試験を通過して、大学生になった経験がありません。高校を中退しまして、それ以降、人権の世界、戦争に反対する世界に進んでしまいました。僕は、そういう意味では６５年、７０年、８０年にかけて、大学を潰しにくることはあったとして

も、大学の先生になるということは、毛頭考えなかった。だから、大学の仕組みがよくわかっていません。しかしこの2年間、学生の皆さんと話し合う中で、気がついたことがあります。それは大学というのは、高校とか中学とは、全く違うシステムを持っているということです。小学校、中学校、高等学校には、校がつきます。学校の校は、僕たちの世界でいうところの校正と同じ言葉です。原稿を書いて、印刷物にしてもらったものを、間違っているかどうか、調べることを校正と言います。校正の校です。学校の校は、比べて選ぶ、比べて正すという意味を持っています。そういう意味では、小学校も中学校も高校も比べられます。この成績がどうとか、あの成績がどうとか、クラスの何番目とか、学年で何番とか。ですから校がついています。しかし大学は、その校がありません。大学校は、日本では、防衛大学校以外にはありません。その他は、大学で終わりです。大きく学ぶ、しかし比べない。皆さんをこの大学の何番目の成績とか、何とか講座の何番目であるとかは、しないわけですね。そういう意味では、皆さん方は、自分一人で自分をつくっていかないといけない。八木先生がおっしゃったように、

さまざまなシステムがあります。人権教育研究センターもそのひとつです。そこで皆さんは、自分をつくっていく。ひとと比べずに、自分という人間をつくっていくには、大学はよくできるところです。僕も初めて大学に来た時、何も教えてもらいませんでした。前期が始まる。何月何日から、何時からという通知はきますが、どうしたらいいかということは、大学当局は一切僕には教えてくれませんでした。必死でどうしたらいいんだろうかと思って、この2年間をやってきました。3年目にかかって、ちょっと落ちついてきましたが。自分が、自分一人の気持ちで皆さん方と付き合わねばならない。皆さん方も今までのように、何とか高等学校の何とか担任の先生のクラスの何とかではなく、一人です。一人として、自分がどのような講義を選ぶのか、どのようなことを勉強したいのか。どのような友だちをつくりたいのかを、選ばざるをえません。大学はそのことについて一切関与しません。ですから、高校とは全く違うということを、まず頭に叩き込んでいただきたいと思います。その上にたって、今日の話を進めていきたいと思います。

桜の季節です。最近は歌の世界でも、桜をテーマにし

た歌がたくさん出ています。あるいは世の中、ちょっと経済の傾向がよくなってきた。皆さんのように、大学受験を突破して大学生になった。うれしいということもあります。金、土、日、阪神タイガースが巨人に3タテを食わせて非常に強い。僕、阪神タイガースファンですが、喜ばしい状況がある。何となく暖かくなってきて、ほんわかとした気分もある。しかし皆さん、もう一つ忘れてもらっては困ることがあります。それはほんわかした気分を、大きくとらえている社会事象、日本が戦争を始めたということです。今日の朝のテレビニュースで流れていましたが、イラクに派兵された日本の自衛隊が、鯉のぼりを揚げている。砂嵐の中で鯉のぼりがパタパタ泳いでいる。日本の自衛隊がイラクに行って、イラクの人々の想いとは関係なく、日本の文化を理解してほしいと言って、鯉のぼりを揚げている。あんなの、したって、イラクの人たちにわかりませんよ。だってイラクに鯉がおるかどうかわらないんだから。我々の時代性は、日本が遂に戦争を始めてしまったと、後世に特色づけられるでしょう。自衛隊というのは、自分を衛る隊と書きますが、自衛隊は、自分たちを衛る。こういう言葉を習ったかどう

かわかりませんが、国家の暴力装置です。国が持っている暴力装置です。国の統治機構に反抗するものがおれば、あるいは国の利を害するものがおれば、それを暴力で粉砕する装置です。そういう意味では、自衛隊というのは権力を衛る隊なんです。国の統治機構を衛る隊です。暴力装置であることは、間違いないわけですから、いくら政府が、愛される自衛隊と言ったって、よその国から見れば、自衛隊のことを自衛隊と訳しません。皆、アーミーと言います。軍隊です。軍隊が完全武装でイラクに派兵される。インド洋上をうろうろすることを考えれば、これは明らかに、日本が戦争を始めたということになります。

この時代認識を持っていないと、皆さん方の4年間、留年する人もおるだろうし、途中でリタイアする人もいるだろうと思いますが、4年間で、自分一人で、自分をつくるということができないのではないか。そういう時代認識を持たないと、自分というものは、完成していかないのではないかと思います。

●始まりは、ドラマのごとく

ここまでが掴みです。これから本筋ですが、皆さんはＳＭＡＰをご存じだと思いますが、中居正広が主演したドラマがあります。僕は、テレビがあまり好きじゃない。映像文化論を教えているわりには、テレビが好きじゃない。でも、今年になってドラマを見続けて、最後まで１回も欠かさずに見てしまったドラマがあります。それは、日曜日の夜やっていました「砂の器」というドラマです。原作は、松本清張という推理作家ですね。今までにも映画になりました。テレビドラマにもなりました。中居さんが熱演していまして、あそこまでやるかと興味がありました。日曜日は、８時から「新選組」があって、９時から「砂の器」があって、１０時から「ウルルン漂流記」があって、面白いなと思って見ていました。「砂の器」になぜ興味をもったのか。僕が中学の頃、「砂の器」という映画が公開されました。それを見たのです。中学生の頃ですから、人権意識とか、人権教育とか同和教育が一切ない時代に、その映画を見たんですが、その映画の中で何となく引っかかっていたものがあったワケです。引っかかっていたんだけれども、どうも自分も、そう思っ

ていたというところがあって気になっていたんです。それから１０何年かして、テレビドラマでまた同じ「砂の器」がつくられました。それがつくられた時に、執拗に「誤解をしないでほしい。これは差別につながる表現があるけれども、そういうことを意図しているのではない」ということが、ドラマの放映時間が終わるたびに、テロップで流れていたんですね。皆さんも小説とかお読みになると思いますが、「砂の器」の粗筋は、ある事件が起こった結果、東北の町からお父さんと幼い子どもが逃亡生活に入る。日本海側を流れていって、舞鶴とか京都の日本海方面を放浪する。鳥取県まで行くという筋であって、その少年は、お父さんが逮捕された後、長崎まで流れ、そこで自分の人格を変えるわけですね。友だちが死んだことで、自分がその友だちになりすまして、東京に出て、東京で成功するんだけれども、自分が名前を変え、人格を変えてしまったことを知っている人間が現われて、その人を殺す。顔もぐちゃぐちゃにして、手の指の指紋もとって殺して、自分の過去を抹殺しようとするわけです。その青年が主人公のドラマです。

原作では、推理小説ですから、青年を追い詰めていく、

刑事の目線で書かれていたわけです。しかし今回、さすがＳＭＡＰの中居の主演である。当然、中居の目線、逃亡する側の目線でドラマがつくられていく。問題は、なぜ逃亡したか。ここなんです。なぜ親子が逃亡したのか。原作では、お父さんがハンセン病の患者であったということが書かれてある。東北の村の中で、忌み嫌われて村八分になるわけです。そのことに腹を立てた父親が村民を殺し、放火をして子どもを連れて逃げる。逃亡生活に疲れた子どもが、父親の子どもであることを拒否して、人格を変えて成功していくという筋立てなんです。前回のテレビドラマでは、ハンセン病を根拠にした村八分はまずいということで、言い訳を一杯していたわけです。ハンセン病が原因で村八分に会って、人を殺して逃げるというのはグツ悪いと。ハンセン病の人が誤解されるということで問題になった。今回、僕はそこのところをどのようにストーリー展開をするのか。ハンセン病であれだけ批判があったのだから、ハンセン病ではやらんだろうと思ったんですが、うまく逃げたシナリオになっていました。つまり村八分に会って、医者にも診てもらえない。皆さん、村八分ってご存じですか。江戸期にできた

ひとつのリンチ、私刑の一つの形です。村の中での差別とか、村のルールを犯した者に対して、村の人々が談合して村八分にするわけです。村八分は、八分は付き合いをしない。付き合いの幅を十とすると八は、相手にしない。阻害する。排除する。二分は何か。葬式と火事なんです。葬式の時は、付き合おう。火事の時は、付き合おうというふうに、二分は付き合うが、その他については、一切付き合わないというのが村八分です。村八分のために、お母さんが病気になっても医者も診てくれない。死ぬ。そのことに逆上したお父さんが、村中に火をつけて２０人の村人を殺害して、子どもと一緒に全国を流れていくとなっているわけです。これは見ていて「あ、うまいこと逃げたな」と思ったんですが、ストーリー上、ハンセン病を逃げたなと思ってじっと見ていると、やっぱり逃げきれてないワケですね。

事件が起きる原因を、村八分に会ったからと、そこでしか説明していないワケですね。しかしどうして村八分に会ったのかという理由は、ドラマの中では明かされてない。村八分でひどい目に会って、人を殺して逃げた。なぜ村八分に会ったのか。西日本の各地には、被差別部

落があります。ドラマの中で、お父さんが村八分に会って吐く台詞があるんですが、「なぜ俺のところばっかりなんだ。なぜ俺のところばっかりが村八分に会うんだ」と言って、叫ぶわけです。ふと、ある意味で、僕には、部落差別の結果として、村八分に会ったのではないかと考えさせられたのです。そこまでドラマは、説明をしていませんでしたけれども、その臭いを強く感じました。一般に東の方、東京より東の方には、被差別部落がないと言われています。しかし今日、いろいろ研究がされて、少数ではありますけれども、被差別部落があることがわかってきています。被差別部落以外でも「狐憑き」とか、「目刺し」とか、そういう差別構造はあるワケです。狐憑きの家系は、村八分に会うということがあるわけです。ドラマの中で、「なぜ俺のところばっかりなんだ」と東北弁で言います。「わがとこばっかりなんだ」と。それがドラマの一番最初だとするならば、そこになんらかの差別があったのではないか。単なる村のルール違反だけではなく、差別があったのではないかと疑わせる。そこのところを説明していないから、ただ中居正広の演技、熱演だけが目立ってしまうんですが、僕は、そういう感

じを強く受けました。

●私的、村八分から

僕は、高校を中退というよりは、高校1年の時、退学しました。1年間授業料を払えなかったということで、学校当局から「授業料を払えないなら退学させる」と言われまして、そう言われても家には、お金がないわけで、退学を受け入れざるをえなかった。それほど貧乏な生活でありました。それ以降、僕は、酒屋の店員として働き始めて、今日に至っているんですが、ドラマの中にあった村八分のように、僕自身が非常にそれに近い感覚で、村八分もどきに会ったことがあります。もちろん江戸期のように村人が談合して、「こいつらを排除しよう」としたワケではありません。しかし僕は、明瞭に村八分に会っていたという感じを持ちました。子どもの時です。小学校3年生の時でした。僕の家は、大阪の都島区にありました。下町です。本当は、大阪の帝塚山というところで生まれ育って、結構、父親は働き者で、木綿問屋をやっていました。暖炉がある家に住んでいましたから、相当お金があったような気がします。お金はあったんだ

けれども、第二次世界大戦が激しくなって、僕の父親は、売るべき木綿がなくなったということで、大阪湾を横切って泉州にいくワケです。織物の産地です。そこで統制物資、木綿とか繊維は統制物資であって、それらを法に違反して、闇で手に入れることをやっていました。それではいずれ捕まるワケで、僕の父親は逮捕されて、刑務所につながれる。僕は、そのことを知りません。その時には、僕はまだ母親のお腹の中におりましたから。父親は、刑務所からそのまま、赤紙1枚をもらって、召集令状という兵隊になれという赤い紙切れをもらうワケです。それをもらうと、兵隊に行かないといけない。刑務所から直接軍隊に引っ張られまして、僕の父親は、僕の顔を見ずに、「満州」、今の中国東北部で戦死しました。

父親は、僕が生まれるということがわかっていましたから、相当な財産を残していったんですね。財産を残したんだけれども、貧乏というのは、お金に苦労すると言いますが、あれはウソですね。貧乏というのは、お金に苦労しません。お金に困るだけです。お金に苦労するのは、金をたくさん持っている人です。お金をどう使うか、減らしたらいかん、と考えるとお金に苦労します。僕の

母親は、すでに死にましたけれど、糖尿病で目も見えなくなって、障害を持ったまま死にました。その母親と、僕とは性格が正反対でして、非常にエエ加減な、僕も相当エエ加減ですが、とにかく男前が好き。父親は戦死しているわけですから、僕を抱えて金はあるわけです。金は残してもらっていた。それを、どっと美男子に入れ揚げて、とっ変え、ひっ変え男と恋をする。当時では、なかなか開明的な考え方で、単にスケベェだっただけなのかわかりませんが、そういう母親でした。僕の知る限り、6人の男を変えました。そのなかの2回目の父親は、すごく男前でした。

僕は今、河野という名前を名乗っていますが、その当時も、河野でした。なぜそうなのかよくわかりませんでしたが、僕には半分だけの妹が2人おります。その妹は、遠山という姓なんですね。2回目の親父が、飲む、打つ、買うの達人みたいなひとでした、3年前に死にましたけども。そのひとが、僕の実の父親が残した財産をスッテンテンに使い切って、あまつさえ、母親は、再婚しているわけですから、当然、僕は連れ子で、遠山の姓に入るわけですが、僕だけを河野姓で残しました。戦死した父

親の軍人恩給をもらうには、遠山の籍に入ることができないのです。家族は皆、遠山姓なのに、僕だけは河野だった。その軍人恩給も使い果たして、本当に赤貧洗うが如しです。皆さん方の生活と全然違います。今はコンビニに行けば何でも売っていますが、僕の小学校の頃は、戦争に負けた直後、焼け野原の時代で、貧乏の極みを経験しました。

そしてたまらずに、ある日、家族揃って夜逃げをしました。今、映画で「夜逃げ屋」シリーズをやっていますが、あんな華やかなのではなく、食べるものもない、金もない、近所には、借金とりが山ほどいるという生活から逃れるために、家族と一緒に、三輪のバタコの車に、ありあわせの道具を積んでの夜逃げでした。大阪の都島区と言えば、下町といえども大阪市域の中にありますから、都会です。その都会から逃げ、たどり着いたのが、大阪と京都の狭間にある山間部の村でした。そこで僕が経験したのは、当然と言えば当然かもしれませんが、ほぼ村八分でした。僕たちが住んでいたところは、村の外れの一軒家で、到着したその日から、村人が遠くからこっちを見ている。学校にも転入するわけですが、学校の中

でも孤立する。端的な例を言えば、小学校3、4年の時、音楽の時間にハーモニカを教えてもらいます。僕は、貧乏ですからハーモニカを買ってもらえない。村の中にもう一人、僕と同じように、村八分もどきにあっていた男の子がいました。その人のお父さんは、広島から村に引っ越しして来た、石工、石垣に積む石、六角形の石をつくる職人さんでした。当然、村の人間ではありません。僕も都会から夜逃げしてきた人間ですから、その村の人間ではありません。

その結果、どういうことが起こるか。夜逃げしてきたわけですから、村の人たちがやっている、お米をつくることもありません。畑をつくることもありません。山林の仕事をするわけでもない。村の中にある2軒しかない雑貨店を利用するにも、お金がない。相当な山の中です。麓は茨木、高槻市につながっています。当時、学校では給食がありませんでした。お弁当を持っていくわけですが、貧乏ですから弁当を持っていけませんでした。昼のサイレンがなる。手で回す、ウーウーというサイレンでしたが、それが鳴ると、一目散に家まで駆け戻って、食べるご飯がありませんから井戸水を飲んで凌いで、昼休

みが終わると、学校まで走って帰る生活でした。学校で、教材としてのハーニモカを購入する。それぞれが街に買いにいくことはできません、山の中ですから。だから、学校がまとめてハーモニカを買って、児童たちからお金を徴収する。でも、クラスは、３０人なのに、届いたハーニモカは、２８本だったんです。なぜ３０人なのに２８本なのか。石工の息子だった友だちと、僕だけがハーモニカを省かれるわけです。それで助かった部分もあることはあるんですね。音楽の時間、僕と彼だけが堂々と校庭で遊んでいる。皆、プカプカやっている時、僕らはハーモニカがないわけですから、授業を受けられない。先生も「お前ら、勝手にせよ」という学校生活です。

村で泥棒事件が起こります。一番先に僕たちが疑われるわけですね。「あいつらに違いない。あの家の奴らが泥棒をしたんだ」と。ある時なんか、牛が盗まれて村長以下、村役場の人たちが、僕の家に来て、「牛が盗まれたんだけど、何か心当たりはないか」と言うわけです。牛みたいなもの、盗みますかいなです。モウーモウー煩いし。餌をやらないといかんし。引っ張って歩いたらすぐ見つかります。誰かが車で運んだに違いないんです。

それでも、僕の家と、石工の息子の家は疑われました。もちろん、そのことだけをとって、非難しようとは思っていません。村という文化の中に、全く違う文化を持った人間が入ってきたわけですから、異端なのですから。それにしても、村の文化が僕たちを排除しようとした、子どもをそういうふうに排除した事実は、切ない。そういう思い出がありました。畑に一杯野菜はあるんですけど、それを売ってもらえません。お米もたくさんとれるんですけど、売ってくれない。僕が小学校から中学校にかけて、過ごした時代は、毎週2回、テクテク片道2時間かけて、麓の町まで行って、何がしかの食べ物を買って、家まで運んで帰るのが、僕の幼い頃の原風景です。

●するとされるの対立

その中で気づいたことがあります。戦争するとか、何か悪いことが起こるとか、オウム真理教の麻原被告のことを考えてもらうと、おわかりになるでしょう。彼は熊本県の盲学校の出身で、その学校の先生を取材に行ったことがあって、そのひととなりを教えてもらったことがあります。まぁそれは置くとして、オウム真理教の人た

ちがああいうひどいサリン事件を起こす。その時に一斉にひとびとが言います。「麻原にだまされたんだ」と言うワケです。あるいは戦争をする。それは「軍部の一部が、国民を煽動して戦争を始めたんだ」。誰かが差別事件を起こすと、「誰かが差別を煽ったんだ」と言います。つい最近も、僕の住んでいる、大阪の北の果てで、大阪のチベットとも言われています箕面市で、精神障害者市民の地域生活支援事業をやろうということで、ある建物を事業所にしようと考えたひとたちがいます。人権教育の町、人権宣言の町なんですよ。人権条例も持っています。その町で精神障害者市民の地域生活支援事業を始めようとした動きに、アッという間に7，０００名の反対署名が集まったんです。これらは、ある意味での村八分です。僕は幼い時に、村八分もどきの経験をする中で、あることに気づかされたんです。それは村八分というのは、村八分をする側の人間と、される人間がいる。そして例外なく、そのどちらかに人々は、選別される。包摂されてしまうということです。

僕は、たまたま皆さん方のように、成長しませんでした。僕の足は結構長いんです、身長の比率から言うと。

惜しむらくは全体が短い。はっきり言うとチビです。だから体育会系になれなかったんですね。チビだから、仕方がないから本を読んだり、スポーツは、貧乏で縁がなかったので、ものを書いたりすることばかりで過ごしてきました。その中で、村八分をする側、される側という本質、誰かが確かに旗を振った、煽動した、大阪の言葉で、「ケツかいた」ことがあろうかと思いますけれども、実際に村八分をするのは、村人たち一人ひとりなんです。どこかの誰かがやっているワケではない。自分たちがやるんです。それは、現在でも差別構造としてあると思います。もともとは貧乏というのが、ベースになるのですが、村八分をするという根拠の中にある憎しみの連鎖、憎悪の連鎖を、我々は抱えて生きているのだと思います。

皆さんも花園大学に入られて、なんらかのクラブなどに所属されると思います。入学式の時、クラブの人たちがビラを撒いて、「わがクラブに」と言っています。八木先生も準硬式野球の顧問などという、柄にもないことをされていますが。体育会系というのは、最近はそれをやると入部してくれないからあまりやりませんが、僕が大学を潰しに行っていた頃、体育会系はものすごく、上

下の序列がはっきりしていました。1年違うと天国と地獄みたいなものです。新入生は上級生の面倒をみる。身の回りの世話をするのは、あたりまえみたいな雰囲気。上級生がキャンパスの向こうの方を通っていて、こっちの方を見てないのに、下級生は直立不動で、「オッス」とか言って挨拶をしている。当然、鉄拳制裁、ボコンと殴ることくらい平気。新入生は皆、泣いていました。泣かない人もおるけど、ほとんどの新入生は先輩の洗礼を受けて、泣きながら先輩の面倒をみて、クラブ活動を支えていく役割を果たしていました。だから新入生の時、そんなにひどい目にあったのだから、先輩からボコンと殴られて、身の回りの世話をさせられて、「弁当買うてこい」と言われて、「ハイ」とパシリまでさせられて、辛い目にあったんだから、自分が2回生になったら、新入生に優しくするだろうというのが、普通の感覚だと思います。しかしほとんどの学生は、2回生になると、今度は新入生をドツキ回す。自分があれだけ殴られたから、もっと殴っとこうと思って、新入生を殴る。これは体育会系だけではありません。

児童虐待があります。子どもを親が虐待する。最近も

事件が一杯あって、子どもを虐待した上に殺す、餓死させるという事件が全国で起こっています。僕の友だちが、児童養護施設の職員をやっていまして、そこで経験したことを教えてくれましたけれど、児童虐待を受けた子どもが大人になって、子どもが生まれると、その子どもを虐待する率は、児童虐待を受けなかった親よりも、児童虐待を受けた親の方が、はるかに確率的に高いということです。これは大学の体育会系のことひとつとってみても、そのことにつながっていく。つまり、やられたらやり返す。おそらく村八分という考え方の中には、村八分に会ったか、会うことの恐ろしさを知っている。そのことによって自分たちは、自分たちのこととして、他者を村八分にする流れになっているのではないかと思います。

ドラマ上の村八分の理由が、被差別部落差別ではなかったのかの疑問。そのために自分の連れ合いを殺され、村人たちを殺して、全国を転々として流れていく話を、自分のことと重ね合せて観ていて悲しかったし、自分のことのように思えて、何回も涙しました。そして、自分のことを振り返って思った。村八分もどきにあった自分が、誰かを村八分にしていないだろうかと。秘かに考えつつ

酒を飲んでは、酔いつぶれ、寝てしまうというていたらくでしたが、そういうことを考えました。

なぜ人は、こんなに悲しい、辛い物語を書くんだろうか。つくるんだろうか。皆さん方も多分、いろんな意味で、これからも辛くて悲しい物語に出会うことがあると思います。もっと楽しいことを書けばいいじゃないか。心がうきうきすることを書けばいいと思うのに、なぜそんなに悲しいものを書くのだろうか。皆さん方の気持ち、僕の気持ちを高揚させるようなものを書けばいいのになと思っていたんですが、これも差別、人権の問題に深くかかわった形で表現される。憎悪の連鎖もそうです。なぜ人々はこんな悲しく、辛い物語を好むのか。そういう物語を見、さまざまな事件に出会うことによって、ひとびとは、「自分はあの人たちとは違うんだ」と考えるワケですね。そんなに辛い目に会って、人を殺し、放火をした。でも自分たちはそういう人間ではない。自分たちは、絶対安全圏にあって、そういうことと一切関係ない。その地平から、悲しく辛い物語を見て、そういう人間ではないことを確認していくワケです。そして社会的に自分を位置づけていくワケですね。「自分は差別される側

の人間ではない。自分は辛く悲しい人生を背負っている人間ではないのだ」ということを確認して、自分を確定していくわけです。これは、すべての差別の構造がそうです。皆さん方が、ある時、友だちのグループから、「あいつはちょっと変だ、金払いが悪い、付き合いが悪い、何とか言ってもウンと言わん、笑いもせん」と、理屈をつけて排除される時には、排除した側に、ある論理があります。「あいつと我々は違うのだ」という論理が生まれます。そのことによって、村八分をする側のつながり、「団結」という言葉は使いたくないのですが、そういうものとして機能していきます。もともと貧乏ということをベースにしますけど、さまざまな差別、在日朝鮮人の問題でもそうです。女性の問題でもそうです。沖縄でもアイヌの問題でもそうです。被爆者もそうです。「彼らと我々は違うのだ」と社会構造が働いていく。このことを皆さんは十分知っておく必要があるのではないかと思います。

●情はひとのためになるか

この大学には、社会福祉学部があります。皆さん方の何人かは、社会福祉学部に進学されたと思いますが、心に止めておかなければならないことがあります。今、戦争をやっている社会状況があり、片方で日本の社会福祉を豊かにしていこうと考えられていることがあります。そういうことも含めて皆さん方が、これから直面することを、ちょっとだけ申し上げたいと思います。日本の福祉というのは「お情け福祉」です。世界に誇るお情け福祉です。スウェーデンやデンマークやノルウェーでとられている、社会福祉制度と全く違います。デンマークのバンク・ミケルセンという人も、その点を指摘しています。スウェーデンには、移民の人もいるワケですね。同じ学校の中で、こどもによっては、母国語が違うわけですから、母国語に従った先生がいるわけですね。日本の学校のように、先生が一人だけではない。何人かの先生が教科を教えている。これは、すごくお金がかかることです。皆さん方は、給食だというと、いっせいに、給食当番が配膳室からバケツを持ってきて配って、いっせいに、「いただきまーす」と言って食べたと思います。スウェー

デンでは、そういうことはありません。オーダーメイドです。小学校にもレストランがあって、子どもたちは、自分で自分の好みの食事を選んで食べます。みなさんは、落としても割れないようなプラスチックの容器、アルミの容器で給食を食べたと思います。スウェーデンの容器は、落としたら割れる皿です。陶器の皿です。「落せば、割れる」ことを学ぶためにです。これもすごくお金がかかります。バンク・ミケルセンさんは、「なぜ、こんなにスウェーデンの子どもたちにお金をかける教育をするのか」との問に、「子どもたちは私たちの未来です。私たちはそのうち死んでしまうだろう。でも子どもたちは私たちの後を継いで、この国を、この国の人々を支えていく存在なのだ。だから子どもたちにお金をかけるんだ」と言いました。　あるいは高齢者市民、お年寄りのケアハウスは日本の場合、ケアハウスとカッコいいことを言っていますが、ほとんどが雑居部屋です。一つの部屋に2人、3人、4人、痴呆で放浪癖のある人は、ベッドに紐でくくり付けられて、看護師室の前に寝かされることが、今も行われています。スウェーデン、デンマークは、完全個室です。家にある自分の家財道具は、個室に持ち込

んでもいいことになっています。当然、老人ケアホームでは、お酒も飲めます。賭け事もできます。入り口には表札がかかっています、誰の誰べえと。そういうことは、日本の老人施設にはありません。これもお金がかかるわけです。バンク・ミケルセンさんがまた言うワケです。「なぜこんなに、年を取った人たちにお金を使うのか」との問に、「それは、あの人たちが一生懸命に働いて、税金を払い、我々を育ててくれたんだ。だからその人たちを大事にする、大切にする。あの人たちの人権を守るのは当然のことなんだ」と。だからといって北欧三国がいいと、諸手を上げるワケにいきません。実際には、世界に冠たる、高齢者の自殺率の高いところです。個人主義が徹底したあまり、お年寄りがどんどん孤独になり、自殺する国にもなっています。パーフェクトでいい制度を持っている地域、国はなかなかありません。そのことを頭に入れた上でも、日本の子どもたちにかけるお金の少なさ、お年寄り、高齢者市民にかけるお金の、余りの少なさは、心の中に、みなさんが、しっかりと止めておかないといけないことです。

なぜ日本の福祉がお情けなのか。「高齢者市民、障害

者市民という人たちはこの社会にはいらんものだ、余計なものなんだ」と、ひとびとや仕組みが、基本的に考えているからです。「だからそんな人たちにかけるお金は勿体ない」と日本の政府、日本の権力、日本の統治機構は考えているからなんですね。そのように言うと、「そんなにひどいことを、日本は考えているんだろうか」と考えるけれども、実際に思っています。僕は障害者市民の活動、高齢者市民の活動を毎日やっていますけど、それを日々強く感じます。なぜじゃ、日本の政府は高齢者市民、障害者市民を余計なものと、日本の社会にはいらん人たちなんだと、国を挙げて村八分にしょうとしているのか。それを支えている村八分をする側の論理があるからです。たとえば今、国民年金のコマーシャル、江角さんが、実際に国民年金を払っていなかったということで、袋叩きに会っていますが、国民年金のフレーズは何だと思います？　皆さん方の住んでいる町、村、市の役所の年金の係りところに行くと、必ずポスターが張ってあります。「今は4人の若者で、一人の年寄りの面倒みている。しかし何年後には、3人で一人、何年後には二人で一人。そういう時代がくる。超高齢化社会がやって

くるゾ」というポスターです。「だから皆、国民年金を払え」と、恫喝をかけています。しかし本当にそうか。僕は、そんなことはないと思います。今、介護を必要とする、たくさんの高齢者市民がいますが、その人たちの体がもろくなっているのは、先の戦争の結果、ものが食べられなかった時代を、長く生きて過ごしてきて、今、高齢者になっているからです。皆さん方は、残念ですが、今のようなお年寄りにはならないでしょう。食べるものが一杯ある。そのせいで、病気で死ぬのがオチでしょう。あのポスターは何を語っているか。「年寄りが増えるぞ、大変だぞ」と言っている。長生きするのが、そんなに悪いことなのか。一生懸命生きていくことがそんなに悪いことなんですか。あたかも歳を取ると、悪人であるかのようなもの言いをされる。支えている皆さん方が善人で、支えられているお年寄りが、悪い人間のように思われる。そのキャンペインを、国を挙げてやっている。

障害者市民、これは3日前にあったことですが。あるデイサービスを利用している障害を持った人ですが、今までは週1回、遅れた制度の都市では、週に1回くらいしか、お風呂に入る日がありません。冬の間は、耐えら

れるんですが、冬でもあたたかいお風呂に入って寝たいと思う。週1回と、支援費制度の中では、利用時間が書いてある。男性です。その人が「せめて週2回、お風呂に入りたい」とケースワーカーに話した。ところが、そのケースワーカーが何と言ったか。「週1回でも大変なんですよ、週2回は贅沢でしょう」と言ったんですね。僕も実は、お風呂は嫌いですから、週2回くらいしか入りません。でも皆さん方は、大抵毎日入るじゃないですか。僕の場合は入れるけれども、お風呂が嫌いだから入ってないだけ。日本人は、風呂が好きなのかしらんけど、ほとんどの人は毎日入る。ケースワーカーだって、毎日風呂に入っている。そのケースワーカーが、毎日風呂に入りたいと希望しているけど、制度上、1回しか認められていない。「何とか2回にしてほしい」という人間に対して、「贅沢じゃないですか」という。そんな奴に言われたくないんだよ。毎日風呂に入っている奴に。「週2回の風呂は贅沢だ」と言われたくない。

病院でも特養でもそうです。人手が足りないということで、ほとんどの寝たきりの高齢者市民は、おむつをさせられます。口では優しいことを言っています。「もう

おトイレの時間だけど、人手が足りないのでおむつしておくね。ごめんね」と言いながら、ほとんどの高齢者市民はおむつをさせられる。社会福祉学部に入られた方は、いずれ経験します。実習という何の役にもたたんことをやらねばなりませんから。食事の時間、人手が足りないということで、ご飯の上にビタミン剤やら、薬を乗せて一緒に食わせます。これは食事ではありません。餌です。そういうことが実際に行われている。それをしている人たちは、どう考えているのか。高齢者市民や障害者市民のサポートをしているんだけど、顔は笑ってやっているんだけど、心のどこかで、「ああ、こんなのには、なりたくない」と思っているんです。つまり存在として、その場面の村八分に加担するんですね。全部ではないにしても、福祉の現場で働いている人たちが、そのような意識を持っている以上、国が「こういう人たちはいらないんだ」と考えても当然のことですね。国の制度を支えているのは、皆さん方も含めて我々です。我々の中に、自分のこととして、高齢者市民や障害者市民に対する、人権を何とか豊かにしていこうという考えがなければ、国の制度はお情け福祉のままで終わります。そして終わり

つつあります。

●あなたの横にいる考え方

これは、日本の持っている、ある意味での宿命かもしれないな、なんてことを思います。「日本人」は、日本人という言い方は好きではありません。日本という地域に住んでいる我々は、昔からへんな習癖を持っています。タイタニック号が沈んだ時、氷山にボンとあたってタイタニック号が沈んだ。その時の有名な例え話があります。タイタニックが沈む時に、船長は子どもや病人や障害のある人、女性、弱い人から先に救命ボートに乗せないといけない。海の法律にも書いてあるんですけど、船長はそう考えるワケですね。船にはいろんな国の人が乗っている。そのひとたちに、それを説明して回らないといけない。例え話ですから、氷山にドンとぶつかって、沈みかけている時に説明に回ることはできないですが、物語ですからね。船長が最初にアメリカ人のところに行くワケです。「病人や女性や子どもや障害者の人を先に、救命ボートに乗せないといけない。アメリカはヒーローの国だろう。アメリカンドリームの国だろう。ヒーローは、

弱い人間を助けるのではないのか」と言うと、アメリカ人は「ＯＫ」と言う。「そうだ、アメリカは、アメリカンドリーム、ヒーローの国だ。だから弱い人間は、先に救命ボートに乗っていいんだ」と。次にフランス人のところに行く。「弱い人から救命ボートに乗せるんだ。フランスは文学とロマンの国だろう。文学とロマンの国は弱いものを助けるというロマンを持つべきではないのか」。フランス人が「ウィ、そうだ、その通りだ。フランスは文学とロマンの国だ、だから弱い人を先に助けるんだ」。その次にイギリス人のところに行って、同じことを言う。「イギリスは騎士道の国だから弱い人間を助けるのではないか」。イギリス人は「イエス、その通りだ。イギリスは騎士道の国だから、弱い人間を助ける」。次にドイツ人のところに行く。船長が何と言うか。「弱い人から助けるのが決まりである。そういう決まりになっている」。ドイツ人が「わかった、そういう決まりなら弱い人から助けよう」と。そして、その次に日本人のところに来た。ハイ、皆さんの中で、日本人に船長はどのように説明したのか、わかる方。

※会場の学生から、「義理人情、だから弱い人間を助け

る」との声あり。

全く違います。義理人情は、清水次郎長に見るまでもなく、ずっとペテンですから、それではなかなかいかない。ヤクザは、少数派ですからね。船長はこう言ったんです。「アメリカもイギリスもフランスもドイツも皆、ＯＫしたよ」と。さすれば、日本人は「そうか、皆、そうしたのか。ならＯＫです」と言ったとさ。

日本という地域に住んでいる人たちの文化は、横並びの文化です。僕が繰り返し言っている「村八分をする側の論理」です。自分がその中で仲間外れにされたら困る。そのことが恐ろしいと思うから横を見るんです。横がやっていれば自分もやるんです。自分一人で、自分の気持ちで、ことを選択するわけじゃない。これも仕方なく、我々が持ってきた文化かもしれません。差別につながっていく考え方は、横並びなんです。差別する側に、自分が与することによって、自分を社会的な位相に位置づけていくことにつながっていく。

僕は、今年の９月で６２歳になります。僕が小学校１年生になった時、初めて日本では、学校給食が始まりました。日本を占領したアメリカの世界食糧戦略に基づい

てなされたことですが、日本には、食べるものがありませんでした。皆、飢えていました。そこへアメリカは、日本の子どもたちに脱脂粉乳というミルクの残り滓、ミルクを搾った後の滓を大量に持ち込んできました。第二次世界大戦は、イタリアとドイツと日本が連合国と戦った戦争です。その戦争で負けた日本とドイツに、アメリカは脱脂粉乳を持って行ったワケです。ドイツ人は、脱脂粉乳を受け取ることを拒否しました。「自分たちは、なるほど腹がすいている。おなかはペコペコだ。戦争に負けてベルリンは廃墟だ。でも脱脂粉乳は家畜の餌だ。人間である我々がそれを食うわけにいかない」と言って、脱脂粉乳の受け取りを拒否したんです。日本は、アメリカが脱脂粉乳を持ってきた時、「ありがとう」と言ってそれを受け取り、日本の僕たち、子どもたちに食べさせたんです。これくらいの違いがある、文化というのは。それを我々は認識していく。そのことが一つの自分を形成していく柱になる。

●試されつづける、ボクたち

僕の先輩、同輩レベルの障害を持った友だちがたくさんいますが、その人たちが言っています。先の大戦、第二次世界大戦の時、自分たちは、どのように扱われたのか。今でもお情け福祉の枠の中にいるけれども、戦争に負ける、敗戦直前の頃は、お情け福祉もなかった。「障害を持っている人間を抱えている家族は、お国の穀潰しだ、役立たずだ、非国民だ。戦争ができない、鉄砲を撃てない、モノを生産できない。そういう人間をお国、日本、天皇陛下のもとにある、この国が援助する必要はないんだ」と、あまねくあった配給制度、日本国籍を有している者には、配給されるお米やお酒、芋や食べ物などを支給しないで、配給制度から排除したんです。障害を持っていると配給すらもらえなかった。つまり国家が正面切って村八分をしたワケです。そしてその村八分は、単に、役所の人とか国の機関の人がやったのではなく、隣近所の人がしたんです。我々のすぐ隣近所の人が、「あんたところの子どもは障害があって、お国のために役に立たないじゃないか。お国のために役に立たないような人間に食べ物をやることはできない」と言ったんで

す。我々は、いつもタイタニックの例えのように、試されます。そしていつ村八分に加担する側に立つかわからない。それを皆さん方は、この4年間、花園大学の中で確かめていただきたい。自分というものを自分流のカタチ、他者の誰でもない自分という一人の人間として、自分を語れるようにしていただきたい。

これも例えですが、実際にあった話で、僕の友だちには阪急であるとか、近江絹糸の取締役とかやっている人が結構います。その人たちがこう言いました。新入社員を採用する。採用すると本当にテキパキと問いには答えるし、仕事もやる。能力も高い。でもある時、自分が通勤電車の中である光景を見た時、心が震えたと。そのテキパキ新入社員が、電車の中でマンガの本を開いて、口を開けて笑っていた。実際にあった話ですよ。次の日、会社に行って「君、会社辞めてくれるか」と言ったそうです。新入社員が「なぜですか？就業時間以外の時間は、個人の自由じゃありませんか？」と反論するので、「まだ試用期間中だ。雇うか雇わないかは、まだ会社に権利がある。君を雇う気は失った。確かに君は、能力がある。いろんなことができる。でも電車の中でマンガを開いて、

ガハガハ笑っている人間を雇うほど自分は、寛大ではない。自分を高めようとする人間でないことは一目でわかる。もちろんマンガ文化がある。日本の文化の中で、マンガが大きな意味を持っていることはわかるけれども、自分は会社を経営する人間だ。多くの社員や株主に責任がある。その会社で働いてもらう人間が、電車の中でマンガを見てガハガハ笑っているとしたら、雇った自分の見識が疑われる。だからやめてくれ」とタンカを切ったんですと。今年にあった話です。4日前、一緒に呑みながらその話をしていました。別にね、マンガを読んで悪いことはないワケです。でも皆さん、時、所というのを認識しなくっちゃ。一人前の大人が、電車の中でマンガの本を読んでガハガハ笑っていたら、いくら能力があったって、人格を疑われます。マンガを読むなら自分の部屋か、自分が楽しんでできるところで読むとかしたらいいワケで、公衆の面前、パブリックな場でやるような行為ではないと僕も思いましたし、働く権利ですら、多様な視点があると言うことですよね。自分のことが、自分の言葉で語れるようになることと、同時に他者の言葉も、自分の意志で聞くようになっていただきたいなぁと。

●すべてのこたえは、自分の中に

冒頭に戦争の話をしました。戦争中、障害を持った人たちがどのように扱われてきたかをお話しました。障害者市民運動、障害者福祉の歴史を研究した結果、障害者市民が戦争を起こした試しは、ただの一度もありません。障害を持っている人たちは、戦争ができません。戦争によってひどい目に会うか、戦争によって、障害者が生まれるということはあったとしても、障害者市民が戦争によって、いい目にあったことはありません。ですからそういう意味では、障害を持った人たちは存在として「非戦」です。戦いに非ずです。この中には、障害を持っている方もおられるかもしれませんが、我々は、障害を持っていません、僕は、そろそろ持ち始めていますが。存在として非戦ではありません。

自分は自分の力で、自分というものをどのような存在にするのかということを、自分で考えなければならない。なんでもできる人間は、戦争もできる、そういう存在です。4年間、いろんなことがあると思います。楽しいことも一杯あります。堅苦しい話も一杯ありますが、友だちも一杯できます。恋もできます。勉強もやろうと思え

ば嫌というほどできます。この4年間を、村八分にする側に立つのではなく、一人の人間として自分をちゃんと選べるように、自分という人間を、こういう人間だと思って、卒業の時に、花園大学の校門から出ていってほしいなと。そういう人間を社会は、求めています。自分で考え、自分の考えをちゃんと他者に伝えることができる人を社会は、求めています。ぜひそういう4年間を送ってほしいと思います。新しいことが始まる時は、皆、胸がわくわくします。皆さん方の目の中には、まだ花園大学に慣れない、戸惑いに似た好奇心の色が一杯あります。でもこれからの4年間には、楽しいことがテンコ盛りにありますから、戸惑う色を押し隠してでも、ぜひ自分の考えや意見を述べていけるような4年間にしていただいたい。この大学を卒業した時に、自分流のカタチができていることを、ぜひ達成していただくようにお願いして、終わりたいと思います。ありがとう。

福祉を学ぶ心構え

牧　口　　一　二
（障害者文化情報研究所所長・大阪市立大学講師）

●はじめに

いろんなことを身体で感じてください。次の世の中をどうかちょっとでも人間にとって一人ひとりが「生きててよかったな」と思えるような社会を皆さんの手でつくってください。僕もそういう日本を、世界をつくりたいと思ってやってきたつもりなんですが、悲しいことに私の願いとは逆の方向に、どうも今の世の中が動いているようで、私たちの、皆さんの先輩の力ではどうしようもありませんでした。自分たちができなかったことを皆さんに託すのは厚かましい話でもあるんですけど、どうか次の世代をよろしくお願いします。

今日、私のタイトルは「福祉を学ぶ心構え」という、ちょっと立派なタイトルなんで恥ずかしいんですが。2か月前から咳が出て止まらないんですよね。どういうわ

けか起きている時はたまに咳き込むんですが、声も出ますし、話も聞いてもらえると思うんですが、夜、寝た時はひどいんですよね。横になったら身体の状態がそういうことになるのか、あたたかくなるから咳が出るのか咳き込んで喘息みたいな状態になります。今までそういう経験が全くなかったもので、突然今までなかった身体の症状が出てくると戸惑いますね。2か月前からですからまだ戸惑っている段階です。医者に行っていろんな薬を出してもらって、早く咳が止まってほしいから言うことを聞いて薬を飲んでるんですけど、一向に効果が現れてくれない。お医者さんに「全然、効きませんけど」と言うと「薬を変えようか」と変えてくれた薬でも全然効果がなくて、副作用はちゃんと出てきたりして厄介やなと思います。口がすぐカラカラになってしまうんです。自分でお茶をもってきました。咳き込んだ時、喉を潤すことがあるかもわかりませんが許してください。このように僕自身の心構えができてないのに、心構えについて話をするのが恥ずかしくて、さっきからビビッてるんでけど。与えられた時間、普段思っていることをできるだけ皆さんにお伝えしたいと思います。

●私は「福祉」が嫌いです

皆さん、福祉ということを勉強されようとしている人たちですよね。さて福祉という言葉にどんなイメージが皆さんの頭の中にあるんでしょうね。福祉というのは決して悪いものではなくて、辞書なんか引いたら「幸せを追求すること」。福という字も祉という字も「幸せ」という意味があると書いてあります。そのこと自体は決して悪い言葉ではないんでしょうけれども、僕は障害者の一人としてこの社会でずっと生きてきたんですよね。社会の中で障害者という立場で生きてくると、今の仕組み、制度の中で福祉の恩恵に預かる人間の一人ということで僕という人間が存在することになってるわけですけれど、嫌な言い方をしたら「皆さんからいろんなお恵みをいただいて生きている」。私が生きているということは、形の上ではそうなってしまう。だから本来の意味は決して悪い意味ではないんでしょうが、僕は福祉という言葉が嫌いです。僕には嫌いなイメージがある、それを皆さんが学ぼうとされているわけで、そのあたりのギッャプは、どない考えたらいいんだろうと思っているんですが。

花園大学の林先生も八木先生も大阪市立大学の出身だ

そうですが、私は大阪市立大学の教養課程で２５年、障害者問題論をやってきました。はじめは「障害者問題論」と言っていて、最近「障害者と人権」と名前が変わりました。２５年もやっているものですから、最初の頃の学生さんは自己紹介をすると「あ、親父と同じ歳や」という話がよく出たんですが、この頃は　「あ、おじいちゃんと一緒や」と言われてしまうんですね。２５年もたつと学生さんの歳は変わらないのに僕だけ歳とっていっちゃう。アララと思っているんですけど、それくらいやってきて、最近の学生さんに「僕たち障害者が運動を始めた頃、街に出始めた頃、こんな状態だったんだ」と紹介したりします。

今から３５、３６年前、私たちが車椅子で街に出ようということで運動が始まりました。いろんな運動があるんですが、車椅子と街というのは具体的に問題点がわかりやすいですから社会に対するインパクトが強かった。車椅子では階段が昇れないから「エレベーターをつけてくれ」という運動を始めたわけです。ところがなかなかエレベーターはつかない。今でこそバリアフリーという言葉が一般用語になりましたが、その頃は「バリアフル」

といったらいいのかな、あちこちバリアだらけの時代でした。私たちが電車に乗りたいと駅に行って、駅員さんに「電車に乗せてくれ」と言いますと「そんなん、危ないからやめてくれ」と言われて、改札口で駅員さんと押し問答が始まった。そんな時代でした。私たち障害者も人間だから社会の中でやりたいことをやりたいし、十分生きていきたい。そんなん当然のことで、断られても、断られても駅に出向くようになりました。その頃、私は松葉杖をついてたんですけど、車椅子の仲間と一緒に駅によく行きました。

つまらないやりとりがあるんですよね。その頃すでにシルバーシートはできてましてね。よく電車に乗るとアナウンスやっていました。「お年寄りや身体の不自由な方々に席を譲りましょう」。私たちはそれを盾にとって「僕ら障害者を乗せないというけど、身体の不自由な人には席を譲りましょうと放送してやるやないか。どうしてくれるんや」とやる。と「あれは松葉杖をついているとか、ちょっと身体の不自由な方の話でして車椅子の人はとてもとても」。何かお互いに情けない会話をしてたんやなという時代でした。私は交通局とやりとりしてい

て、やっと交渉の場を持つようになったんですね。私は大阪の地下鉄にエレベーターをつける運動から始めました。

●京都の仲間に突き上げられて

その運動を始めたきっかけは、京都で初めて地下鉄を走らそうという計画が生まれた時だったんですね。この大学の人は、京都にお住まいで地下鉄を利用している人も多いと思うんですが、京都に初めて地下鉄を建設しようという段階でした。車椅子の仲間が街に出ようと運動を始めたのと時期的に合ったのね。だから運動が起こしやすかったんです。京都ではそういう計画が発表された時に、すぐ障害者の団体が「同じつくるなら障害者が乗れるようなエレベーターのついた地下鉄をつくれ！」と運動を始めたわけです。タイムリーで、大阪の私たちもそれに刺激を受けました。

翌年だったかな、京都で全国の車椅子の人たちが集まって会合を開く、全国車椅子市民交流集会があったのね。大阪の車椅子の仲間と松葉杖の私が京都の会に参加したんです。京都の車椅子のメンバーはエレベーターをつけ

る運動をやっている途中でしたが、大阪のメンバーが突き上げられましてね、「京都はな、こんな運動やっとるんよ。運動が実って京都の駅にエレベーターがついて、僕らが乗りやすくなるよな。大阪と京都は何本か電車が走っているんやから大阪に行くやろ。大阪、運動やってくれてないからエレベーターないよな。そんなら降りられないやないか。またそのまま京都に戻らなあかん。大阪でも運動やってくれよ」と言われました。これは非常にわかりやすい話でね、確かにそうやなと思った。

京都は運動をやって、ちゃんとエレベーターをつけて電車に乗れるように自分たちでつくっていった。ところが大阪は怠けとって運動やってへんから、京都の人が折角電車に乗れて大阪まで来てくれてるのに大阪で降りられへんからそのまま帰っちゃう。これは申し訳ない。「大阪は運動やれへんから電車に乗れへんのはまぁ自分たちのせいや」と言えなくもないけど「京都は折角運動をやって勝ち取ったのに、その人を大阪で降ろされないというのは大阪の恥ではないか」と私たち大阪のメンバーはそんなことを話し合いました。自分たちが乗れないのは仕方ないけど、京都の障害者の人には大阪で降りても

らう、最低限それくらいのことはしなければならないという思いで、大阪も遅まきながら運動を始めたんですね。大阪はその頃、地下鉄がすでに縦横に走ってましてね。私たちが車椅子で街に出ようという時は、時期が後だったから既成事実として地下鉄が一杯走ってて、運動のきっかけが掴めなかったんです。このように私たち大阪で運動をするきっかけをつくってくれたのは京都の障害者の仲間でした。

●思いがけない運動のきっかけ

それに刺激されて「大阪でも地下鉄にエレベーターをつけよう」という運動が始まったんですが、仲間内にはこうしてきっかけを与えてもらったんですが、大阪の街では説得力のあるきっかけがなかなか掴めない。どんな形で運動を始めようかと思っていた時、大阪の地下鉄の延長工事の話が出たんですね。それも僕たちは交通局と親しいわけでもなかったので、そういう計画はほとんど知らなかったんですが、実は知らせてくれる人がいた。どういう人だったか。延長工事で新しく駅ができる地域に住んでいる、ある市会議員の人が、まるで自分がそう

いう計画を言いだして実現したみたいに、自分の功績のような顔をしてその地域にビラを配ったんですね。「この地域も便利になります。地下鉄が通ります」と地域に一杯撒いたんですね。それをたまたま障害者の仲間でその地域に住んでいる人が「今度新しい地下鉄が通るらしい」というビラを持ってきてくれたんですね。チラシに大きく「この地域も便利になります。何々駅、誕生」と書いてある。

そのビラを持って、仲間と一緒に大阪市交通局に「本当に便利になるんですか？」と確認に行ったのね。「私たちは障害者ですけど、障害者にもちゃんと使えるエレベーターのついた地下鉄ができるんですか？」。交通局は「そんなん、とんでもない。今までの駅と変わらないものしか考えていませんよ」という話なのね。「あ、新しいことを考えてます」「何ですか？」「エスカレーターを採用するようになりました」。新しい企画のような自慢げな顔をしてエスカレーターの話を出しました。「エスカレーターがつくとおっしゃるけど、どれくらいの幅のエスカレーターなんですか？」と聞きますと「今のところ６０センチの幅のエスカレーターを考えています」。

皆さん、６０センチ幅の狭いエスカレーターに乗ったことがありますよね。ちょうど車椅子が６０センチの幅なんですね。ということは車椅子では乗れない幅のエスカレーターを交通局は新しい企画として自慢げに言ったんですね。私たちは「それでは車椅子で乗れないじゃないですか」。私たち障害者はエスカレーターは乗りにくいんですよね。「エレベーターをつけてほしい」「そんなん、とんでもない。お金もないし、そんな計画全く考えていません」という答えが返ってきたんです。

それをきっかけに私たちがエレベーターをつけてくれと運動を公に発表していくきっかけができた。面白いもんでね、大阪でどんな運動を起こそうかと困っていた時に、たまたま目立ちたがり、まるで自分の功績のように発表するようなおっちょこちょいな市会議員がいて、市会議員のビラのおかげで私たちが運動を起こすことができたんですね。これも世の中、こんなふうに思いがけないことで展開していくんだなと、皆さん、ちょっと感じてもらえばいいと思うんです。何がきっかけになるかわらない。どんな運動だっていろいろありますけど、全部自分たちの力だけで一からやっているわけではなくてね、

世の中にはいろんな動きがあります。いろんな動きがある時、自分たちと全く反対の意見を持っている人のやったことも、きっかけになっていくんだなと思うんですね。

●変わって、戻って、また変わる

運動がいよいよ始まりました。だんだん交通局も私たちの意見をわかるようになってきて、はじめは交通局の営業課の係長が２人出てきて私たちと交渉を始めるんです。私たちは１５人～２０人くらいおるわけです。半分くらいが車椅子で、松葉杖ついている者とかボランティア活動をやっている青年とかが私たちの中心メンバーでした。２時間、３時間話し合っていくわけです。そしたら交通局の係長さんも人間ですから、私たちの切実な願い、私たちがこんな立場にいることがだんだんわかってきました。激しい言葉も使いました。義足の友だちは自分の義足を外して交渉の机の上へバァーンと置きましてね、「俺らの気持ちをわかってんのか」と言う奴もおりました。交通局の人もビクッとしたりして、だんだん気持ちがわかってくれるんですね。３時間くらいたったら、交通局の人も謙虚な発言が出だして「私たちは何も知り

ませんでした。本当に申し訳なかった。今日のお話は必ず局内に持ち返り、皆でどうしたらいいか考え直してきます。次の交渉は2週間くらい後にしてもらったら、それまでに局内の意見をまとめておきますので」という話になるのね。私も交渉していて「あ、この2人の係長さん、変わってくれたな」と本当に思えるわけです。人間同士ですから信じれるところがあるわけでね。「ああ、この人たちも変わってくれた。よかったと。次までに局内できちっと方針を出してもらって、次の段階の話にしましょう」と2週間後の約束をして別れる。

2週間後にまた臨むんですよね。係長さん2人が、ほぼ元の2人に戻ってしまっているんですね。全く元に戻ることなんて人間、できないと思うけど、何となく歯切れが悪い2人に戻っているのね。僕たちは「この間、言ったじゃないですか」。また一からの話になる。おそらくね、係長さん、一回目の最後のほうには気持ちを変えてくれたから、その通り局内で報告してくれたとは思うんです。それもしないというほど僕は人間を信じてないことはない。それくらいはやってくれたと思う。ところが上司である部長、課長さんからこんな言い方をされてい

るのね、おそらく。「お前、障害者の人にほだされてどうするんや。そんなこと言うてたらお金ないのに、何もできないやないか。それをうまいこと話を聞いて、適当にまとめていくのがお前の今の役割ではないのか」と言われている。係長さんも家族がある。上司に反抗して首を飛ばされるのもかなわん。そういうので意を決して、元の自分の立場に戻って、立場からものを言わなければならない人に変わってしまっている。私たちはまた一から係長たちに向かって話をやるわけです。そしたらポロポロ人間が出てくるのね。

3時間くらいたったら「申し訳ありませんでした」という話に戻っていくわけですよ。僕なんかにしたら「今度こそわかってくれた」と思うのね。また次の会合の約束をしてまた出向く。そしたら元の2人に戻っている状態が起こるわけです。私はとうとう「係長さん、申し訳ない言い方になってしまうけど、係長さんも組織の人間ですよね。係長さんの立場では責任のあることが言えないことがおありなんでしょう。だけど私たちそういう繰り返しをやっていたらたまらんのですよ。申し訳ないけど、大阪市で一番責任を持って答えることのできる人を

呼んでくれませんか」という言い方をしました。「大阪市で一番の責任者って誰ですか？」。そしたら２人の係長さんが「誰かな」と言って「大阪市長ですかね」と言ったんですね。私は「じゃ、次の会合の時に大阪市長を呼んでください。そしたら私たちは市長と話をします」と言いますと「できるかどうかわかりませんが、とにかく努力してみます」ということで話は終わりました。私たちは「次は市長が来るぞ」と言いながら次の会合に臨みました。そしたらさすがに市長は来なかったんですが、大阪市交通局には営業課という私たち市民の窓口になるところがあるんですが、機械課とかいろんな部署があるわけね。そこの部長さんが１５人、顔を揃えたんです。１５人の人が顔を揃えて私たちと話し合いが始まった。僕ね、先程から「係長さんが立場上言えないこともある、申し訳ない言い方になるけど、係長さんでは答えられないことがおありなんでしょう」という言い方をしましたけど、だけど係長さん、お２人は一生懸命話をしてくれたんだろうと思う。そうでなかったら部長クラスが１５人顔を揃えられないわけね。そこまでやってくれた係長さんに僕は今、ずいぶん昔の話ですけど、ほんとに感謝

しますね。やっぱりじわじわと変わってくれていたんですね。3時間やれば係長さんは変わってくれてたんですね。巨大組織の中でいくら言っても言うことを聞いてもらえなかった。そのつらい立場で私たちと何回も交渉することになったわけね。私たちが最終的に「市長を出せ」という言い方をした。それで係長さん2人は私たちの気持ちもわかってくれているから「何とかしよう」と思ってくれたんでしょうね。

●社会の仕組みが動き出して

部長が１５人顔を揃えてくれたら局内は変わっていくね。僕はそれを目の当たりにしました。１５人の部長さんと私たち１５人の障害者が3時間やりあうんです。係長さん2人が変わってくれたのと同じように１５人が変わるんですよ。１５人の部長クラスが変わると仕組みが動き出したのね。すぐにはエレベーターはつかないですが、車椅子のまま電車に乗れるようになった。

そのころは自動改札機が出始めた頃と重なったのね、運動と。自動改札機は車椅子が通らない幅なんですよ。「一か所でいいから車椅子が通れる幅にしてください」

と要求するのね。交通局は「それはできないんですよ」「なんでですか？」「幅の広い自動改札機をつくれば２人の人が通り抜けられてタダ乗りが増える」。これはしゃあないな。このへんで私たち一人ひとりの人間がどういう心構えで社会生活を営むべきかということが、ここで関連してくるんですけど「タダ乗りが増えるからできない。タダのりする人がいるから結果的に障害者が通れない」という話になっていくわけですよ。「だけど通してほしい」「荷物を運ぶ特別な改札がありますので、普段は鍵をかけているんですが、車椅子の方がいらっしゃったら開けますので、当面はそれで勘弁してください」。私たちはもともと改札口で断られたわけですから、乗れるようになった、一歩前進やなということで「まあいいか」と。

やっと別のところ、荷物用の改札を開けてくれて電車に乗れるようになった。もちろん駅員さんが階段を担いでくれたりして乗り始めたんです。交通局の人とも、はじめは喧嘩をしているんですが、だんだんわかりあって親しくなる部分もできてきて、ある時、交通局の方から「すみませんけど、私たち駅員がやってるわけですよね。

車椅子の方がこられたら鍵を持ってわざわざ開けにいくんです。だから、駅員が鍵を開けにいって皆さんに中に入ってもらう時、『ありがとう』と一言でも言ってもらえません？もし皆さんが、ありがとうと言ってくれたら駅員も働き甲斐があるんでけど」。そういう発言がポンと出たんですね。私たち障害者はその発言を聞いた途端にいきり立ちました。「お礼を言えというんですか？ほんとはね、私たちは普通の改札口を通りたいんですよ。他の人と同じ改札口を通りたいんですよ。今はできないんでしょ。だから私たちは遠回りしているんだから、駅員さんから『遠回りさせてごめんね、早くエレベーターをつけないとあかんのやけど間に合わないからしばらくこれで我慢してね』という言葉が出てきたら私たち障害者も人間だから『ああ、いいですよ。早いことエレベーターをつけてね。頑張ってね』というやりとりになる。だけど、そういう会話が出ないうちから『まず礼を言ってくれ』、これは話が違うでしょう」。

そういう言い方でまた喧嘩が始まってしまうんですね。今、考えたら情けないやりとりしてたんだなと思うんですよ。礼を言うべきか、言わざるべきかとか。どっちが

先にどういう言葉をかけるべきやとか。殺伐とした不毛な会話やと思うけれども、だけど私たちはそういう現実があったんだということを、その通り、今を生きる若い学生の人たちに「３５、３６年前の話はこんな状態だったんだ」という紹介をするつもりで話をしました。こんな話を皆さんはどんなふうに聞いてくれましたか？

●なぜ、障害者に人権がないのか

どこの大学でもそうでしょうが、大阪市立大学も、大学の授業は９０分ですが、８０分くらい話をさせてもらい、あとの１０分間でコミュニケーションカードにその日の私の発言への疑問点、反論、感想、何でもいいから私を育てるつもりで書いてくださいとお願いしているのね。最近の大阪市立大学の講座は、私の担当しているのが３００名以上かな。一番広い教室で３００～４００の生徒がいますが、この頃の学生さん、授業をさぼらへんのね。一杯来るんですよ。それだけ入る教室がまずないのね。大学の責任やと思いますが、後ろにずっと立ってるのね。人間がじっと立っているのが何か気になって仕方がない。僕、松葉杖で立っているのが耐えられない人

間ですから、つい、じっと立っているのはしんどいやろなと思う。真ん中に通路があって「新聞紙でも広げて座ってちょうだい」と通路に座ってもらったりして。３００～４００人の学生たちに「昔の交通局とのやりとりで、こんな会話があったのだ」と紹介した時のコミュニケーションカードのほとんどが「なんで礼の一つ言うのにそんなに理屈がいるんですか？」と私の発言に対して批判的に受け取ってくれた人がたくさんいたんですね。中にはこんなふうに私たちに言ってくれる学生もいました。「牧口さん、礼の一つなんか、そんなに肩を張らないで、言っておいたほうが社会はスムーズに生きれますよ」と人生のアドバイスをしてくれる人までいるんですよ。僕にしたら「わかっているよ、そんなことくらい」という話なのね。皆さん、私の話を聞いて大阪市立大学の学生さんと同じような感想を持たれた？　どうなんでしょうね。

僕の意見を批判されるのは全然構わないんですが、その批判が的を射ていたら謙虚に受け止めたいと思っているんですけど、的が外れているのね。「なんでこうなるのかな。私の言い方がまずかったかな」と思ったんです

けど。あまりにも批判の比率が高かったものですから、これはこのまま次の話に移れないなと思って、一週間後の次の講義の時、「この間、感想読ませてもらったらこんな状態やったんや。私が何を伝えたかったかということが皆さんに伝わっていないように思う。だから今日はその話をもう一度したいと思うんだけど、私の講義のタイトルは何というか、皆さんわかって講義を受けてるはずよね」と言いました。はじめ学生さん、キョトンとした顔をしたのね。私は「『障害者と人権』という講座を私は引き受けたんです。障害者と道徳、障害者と福祉という時間を預かった覚えがない」と言ったんです。その時に初めて、学生さんがアッという顔をした。そうなんです。ここにズレが起こっている。つまり礼の一つを言うべきか、言わざるべきか、そういう議論は道徳とかの世界でやってくれたらいい話だけど、私は「障害者と人権」という話をしたくて、その一つのエピソードとして「私たちが街に出ようとした時に、こんなくだらないやりとりがあったんだ」ということを伝えたつもりだったんですよ。全然伝わってなかったのね。

今の僕の言い方で、感じてもらえましたでしょうか。

つまりね、私が皆さんに何を言いたいかというと、障害者問題を人権の問題ときちんと受け止めてほしいんですよ。福祉の問題ではないのね。ましてや道徳の問題でもないんです。それを混同している人が本当に多い、今の世の中。悲しいことにね、僕もいくつか本を書いていて教科書の出版社から電話がかかってきて「牧口さん、何ページのこの部分、使わせてくれませんか？」「いいですよ。拙い文章ですけど何か参考になるのだったらどうぞ」と返事をして「ところでどんな教科書に載るんですか？」「小学校の道徳なんですけど」。エッと一瞬思うんですけど。

●なんで、こんなことになるんや？

さて皆さんの中に「人権」と「福祉」と「道徳」、そのあたりの混同はないですか。社会福祉を勉強している皆さんはまさかと思うけれど、一般社会では混同が多いんですよね、結構。僕が静岡の高校に行った時、いつも僕が話をさせてもらう時のタイトルね、「もしも許されるのだったら」とお願いしているんですが「違うことこそ、ええこっちゃ」というのが私のキャッチフレーズで

してね。「一人ひとり違うということを大切にしたい」というわけで、話の内容にかかわらず、言葉だけでも広がってほしいという願いもあって、私のほとんどの講演のタイトルは「違うことこそ、ええこっちゃ」という言葉を使っています。

静岡の高校へ行ったときのこと、しばらく校長室で待っていて、いざ講堂へ。ちょっと余談になりますが、この頃の小学校、中学校、高校で講堂と体育館を別々に持っている学校が少ないのね。これもね、人間の情緒をなくす原因になっていると思います。人の話を聞いたり、音楽を聴く場所と、スポーツで走り回ったり暴れ回ったりする場所とは違う構造をしているはずですよね。ところが今は予算がないとか言って、たくさんの人数を一か所に集める場所として講堂と体育館を兼用しているのね。ほとんどの小学校、中学校、高等学校が。皆さんはそういう乱暴なものの見方をする大人の中で気の毒なことに育ってきた人たちなんですね。僕はね、ある意味で情操が育ってないと言うけど、大人の社会がそういう環境を与えてないのに「育て」も何もないと思うのね。学校めぐりをやってて気になって仕方がないんです。

ところがその高校は体育館と講堂がありました。「おう」と思いながら校長先生に導かれて生徒さんがぎっしり詰まっている講堂に出向いたんです。その時もびっくりしました。私が校長先生と廊下を歩いて講堂に近づくんですが、物音一つしないんです。普通だったらね、話をする人間が現れるまではね、隣同士とか雑談があって、ワアワアしているのがあたりまえの景色やと思う。ところがその学校は物音一つしないんですよ。僕は講堂で話をするんじゃなくて別のところがあるのかなと思っていました。ところが校長先生が扉を開いたら中にぎっしり生徒さんがいるのね。それだけでびっくりしました。すごい学校と思ったんですよ。

演壇のところに大きく垂れ幕がかかっていたんですが、私は「違うことこそ、ええこっちゃ」とお願いしていたはずなのに「言葉づかい、心づかい」と書いてあったんですよ。僕はてっきり「私が寄せてもらう前に、そういう話をなさった人がいらっしゃるのだな、そのタイトルがまだ外されないまま残っているだけや」と思ったんですね。「前にこんな話をなさった方がいらっしゃったんですね」と校長先生に何気なく言ったら、校長先生が

「いえ、これ、今日の牧口さんのタイトルです」。アレッ。「僕は『違うことこそ、ええこっちゃ』とお願いしていたはずですけど」「いただいています。だけど『違うことこそ、ええこっちゃ』で牧口さんがおっしゃりたいことと『言葉づかい、心づかい』ではそんなに変わる話じゃないでしょ。これは私たちの学校の1年のテーマなんです」と澄ました顔でおっしゃるのね。もう僕はびっくりました。「言葉づかい、心づかい」と「違うことこそ、ええこっちゃ」が同じやと思っているのね。そんなに変わらない言葉だなんて。言葉で思っているのではなくて「障害者問題というものと道徳の問題がそんなに変わらない」と校長先生が思い込んでいるから、そんな発想が出てくる。そういう解釈が出てしまう。もう僕はびっくりしたんですよ。「どんな話をしようかな」と瞬間、思った。今さら話を変えられるわけもなくて、私はそのまま演壇に上がりました。

「僕、今日、ここで初めて知ったんだけど、校長先生に教えてもらったんだけど、ぼくの話をするタイトルが『言葉づかい、心づかい』だったんですよね。僕、知らんかったんや。僕は『違うことこそ、ええこっちゃ』と

いうタイトルを書いてもらっていると思い込んで来たんだけど。だけど皆に聞くね。『言葉づかい、心づかい』なんて言われて、どんな人がどんな話をするか見当つくよね。『皆、言葉づかいに気をつけましょう』とか『心づかいは大切ですね』という話になるよな。だけど僕は大阪からわざわざそんな話を皆さんに聞いてほしいと思ってきたんと違うよ。一人の障害者として長い間生きてきた僕の気持ちを皆に聞いてほしいと思ってやってきたんや。ところが校長先生に聞いたら、これが僕のテーマ、皆さんの1年間のテーマだと聞きました。だからちょっとだけいたずらさせてね」。本当に私の咄嗟の思いつきだったんですけど「ちょっとだけ言葉を足させてください。『言葉づかい、心づかい、魔法つかい』と言ったんですよ。ごろ合わせで入れちゃったんですね。ごろ合わせでこんなふうに瞬間的に思って入れたんですけど、入れてしまってから「ヤッタ」と思ったんですね。「魔法つかい」と言う言葉を入れた途端に上の「言葉づかい」「心づかい」の意味が変わってしまうのね。単なる言葉づかいだったら「言葉づかいに気をつけましょう」という意味になってしまうけど「魔法つかい」が来ると「言

葉も使いよう」という意味に変わってしまう。「心も使いよう」ということになる。「ヤッタ」と思ったんですね。「言葉も使いよう、心も使いよう」という話に切り換えて普段思っていることを皆さんに語りかけました。

このように今の大人、学校の校長先生の中に福祉と道徳と障害者問題がイコールとは言わなくてもほぼイコールくらいに思っている人が本当に多い。言い方を変えると、それが私たち障害者にとっては大きな壁なんですね。その壁を若い皆さんに、ぜひ取り除いてほしいというのが今日の私の皆さんへのメッセージです。

なんでこんなことになってしまったんやろなと思う。おそらくね、小学校、中学校、高等学校、皆さん思い出してください。自分の育ってきた学校時代ね。おそらく障害者の問題を学校の中で採り上げた時、道徳の問題であったり、福祉の問題だったのではないでしょうかね。今、この花園大学でさえ障害者の話を聞こうという姿勢が社会福祉のジャンルの中で考えられているわけでしょう。小学校、中学校では仕方ない話になっている。皆さんはそういう学校生活を過ごして大人の世界に入っていくことになる。このまま何の疑問も持たないでいったら、

それこそ障害者は福祉の対象者でしかないよね。だから私たち障害者はいつまでたっても半人前の、半人前以下の人間として見られてしまうんですよ。どうしてもそうなってしまう。言葉は嫌だけど皆さんからは「施しを与える対象者」になってしまうのね。もう一度家に帰って、時間がとれれば、国語辞書を引いてみてください。「福祉」というのは狭い意味では「施しを与えること」と書いてある、やっぱり。広い意味では「幸せを追求すること」と書いてある。狭い意味では「弱者の人を助けること」と書いてある。そういう誤解が延々と続いているんですよね。僕ははっきり「施しを受ける」立場で生きてきたわけですから「誤解」という言葉をはっきり使えるけれども、皆さんにとって本当に「誤解」と思ってもらえるのか、どうかということなんですね。

●ほんとに「おかしい」とわかってほしい

実はね、私たち障害者が半人前扱い。僕がこんな言い方をしたら「そんなことはない、もう今の世の中は障害者も一人の人間として私たちの仲間としてきっちり認識している」と反論してくれる人はきっといると思う。そ

んな反論がたくさん出てほしいと思っているんですけど。だけどね、今の法律でね、これこれの障害を持っている人はこれこれの仕事には就けない、これこれの免許は与えられませんという法律が歴然として残っているということを皆さん、知ってます？　どれくらい知ってくれているかな。これを「欠格条項」と言うんです。障害者の欠格条項、資格に欠ける。

具体的なことで聞いてみますね。全く目が見えない人は車の免許証がとれないと決められているわけ。皆さんがそういう話を聞いた時に「そんなん、あたりまえや」と思われるでしょう。両目が全く見えない人は車の免許証がとれないことが法律でちゃんと決めてあるわけ。この法律をおかしいと思った人、手を挙げて。おかしいと思った人、いない？　はっきり言うけど、これが世の中なんです。おかしいんよ。

（視覚障害者からの発言）…「僕は運転したいと思ったことない」　だって運転したら先に自分が死ぬだけでしょ。正しいと思う。そしたらちょっと聞くよ。正しいことをどうしてわざわざ法律で決めないかんの？それについてはどんな意見持ってる？「……」　法律で決めな

くても、今、あなたがおっしゃったように免許証なんか取りたくもないわけでしょ。法律で決めなくてもいいんじゃない、違う？　どうですか。たとえば変わった人間、妙な人間がおって、その目の見えない人が、自分が乗ったら自分が先に危ないのをわかっていながら「俺は死んでもいいから免許証を取りたい」と言ったとしますね。そんな変わった人間を防ぐために法律で決めてあるわけ？

どうですか。他の人で意見のある人。ほとんどの人は、彼の発言と合わせて考えてくれたらわかるね。おそらく世の中に全く目の見えない人がわざわざお金を払ってまで自動車の教習所に行って自分の命を落とす車の免許がほしいと、そんな人がいる？　まずいないね。人間にはいろんな人がいるわけだから、それでも死んでもいいから免許証がほしいという人がいたとして、じゃ、その人もらえる？　もらえないでしょ。あのコースちゃんと走らないと免許証なんて出ないわけでしょ。一般の人はそれに気づくのに時間がかかるんよね。

はじめ、僕が「おかしい」と言った時「なんで？」と思った人が大多数だったのではないのかな。あのね、こういうことを「偏見」と言うんです。もういっぺんちゃ

んと聞いてね。目が見えなかったら、これこれはできないと思い込んでいるの、多くの人が。自分の目を閉じてみるから、そう思えるんですよ。だけど生まれつき目の見えない人と、目が見えた人が瞬間、目を閉じた状態とは全く違うということに気がつかない。あなたは今、発言してくれた、あなたは目はいつからですか？「生まれた時から」。一番最初に自分が勉強してくる中で「目」という言葉が出てくるよな。目ってどんなもんやと思ったですか？　たとえを出してほしいんやけど。たとえば本を読んでいて「目」という言葉が出てくるよな。その時、あなたは目というのはどういうイメージをした？
「強度の弱視です」。じゃあ、ちょっと違うな。強度の弱視の人はぼやっと見える。明るいとか暗いはわかる？
ちょっとした違いがものを考える時に大きな違いとして出てくることを感じてくれはった？　生まれつき目が見えない人だという感じがしたものだから。大きくなるにつれて目という単語が出てきた時、目というのはどういうものかと想像されたのかなと聞きたかったんです。だから弱視の方だったら違うよな。私たちと同じような目で明るさを感じ取っていることは認識できると思うから。

●障害者問題は人間学なんよ

僕たちはある意味で同じような状態やと思うんですね。全く目が見えなくて生まれた人、その人の目というのは私たちが目というものの代わりをしてくれているのはどこがやっていると思います？　少なくとも私たちが認識している目が塞がっていて、機能として働かない認識を持つのは大人になって知識として持てるかもしれないけど、実感として持てないよね。私たちは目として働いているところを、全く目が見えない人はどこでその働きをしてくれていると思いますか？　わかる人。指先ね。私たちが目で見ているものはその人たちは指先で触覚的に感じとっていく。網膜移植できる人もできない人もいるけど、それで見えるようになった人もいらっしゃるわけね。ある全く見えなかった人が網膜移植で目が見えるようになったそうです。目が見えない時代はスーパーに行っても皆、商品を触って判断していた。ところが目が見えるようになって初めてスーパーに行った時、何が何だかわからなかったそうです。当然の話やね。視覚的にものを認識するということが全くなかったんですよね。皆、指で触って確認してはったわけね。もちろん目が見える

ようになってから生活の訓練が始まって、いずれは私たちと同じように目で商品の違いが判断できるようになると思いますが、目が見えるようになって初めてスーパーに買い物にいった時、何が何だかわからなかった。その通りやと思う。いくら目が見えても、認識されてないわけですから、その人はわざわざ自分に獲得した目を閉じて、指先でものを触って、これが玉ねぎだったんだ、これが牛肉だったんだと確認しながら買い物をしたという話があるのね。

だからね、障害者の世界は結構、面白い世界でね、私たちが単純に目が見えるとか見えないとか言いますけど、今、いい人がそばにいてくれてありがたいのやけど、目が見える、見えないとか言うのは大雑把な言い方だとわかってほしい。強度の弱視という状態と全く目が見えない状態は全く違っているんだということも認識してもらったと思うのね。そんなふうにね、障害は程度にもよるし、いつから障害を持ったかによって、ものの感じ方、考え方が全部影響されていく。障害者と友だちになってもらったら、間違いなしに言えることは「人間って何だ」ということが本当にわかりやすくなる。幸せなことに私たち

はいろんな障害を持ってこの社会で皆と一緒に生きている。私の場合だったら足が動かない。目が見えない人もいる。そこの学生さんは私と同じように車椅子に乗ってるけれど、同じように見た目は私と変わらない。だけど歳が違う。相当若そうやし。僕は相当歳をとっているという違いはわかるでしょうけど、足が動かない障害者は皆一緒やと思っていたら、これもまた違うわけでね。あなたはいつから？　「生まれつき」。私は１歳なんよね。１歳というとほぼ生まれつきに近いけれど多少違うかもしれない。ハイハイできるかどうかの時期ですから大した影響を受けてないと思うけど、私と彼が何か違っているとしたら、人間が生まれてから１歳になるまでどんなことに影響されているかが見えてくるかもしれない。だから人間学なんですよ。本当に障害者のところで人間がよくわかってくるという話です。

●１００年も障害者を門前払いにしていた

法律でこんなふうに「目の見えない人は車の免許証がとれない」とわざわざ書いてくれている。もっと皆にわかりやすい話をしますね。医者の法律、医師法は１９０

６年に一応の形が整ったそうです。１９０６年にどんなことが決められたか。「目の見えない人、耳の聞こえない人、しゃべれない人には医師の免許証を与えない」と書いてある。はい、このことについて皆さん、どうですか。目の見えない人、聞こえない人、言語が不自由な人はお医者さんの免許証がとれないと決まっているわけ。どういうわけか、足の不自由な人とか手の不自由な人は入ってないんですよ。他にどういう人が入っているか。「精神に障害がある人は医師の免許証が取れない」。１９０６年に一応形が整った法律だそうですが、それが２００１年まで全く変わらないでずっと来たんです。やっとこの頃、障害者の人が街に出ることが多くなって、少しずつ世の中の障害者観が変わってきましたから、やっとこさ「あまりにも古い考え方ではないか」ということで、２００１年に改められたのね、ついこの間。約１００年間全く変わらなかった。ところが全くというのはちょっと間違いで、根本の主旨は全く変わらなかった法律というだけで、言葉は変わっている。面白いことに「めくら、つんぼ、おしには免許を与えない」と露骨に差別語を書いている時期もあったわけね。そうかと思うと「視覚障

害者、聴覚障害者、言語障害者」と言い方をしている時もあるわけ。「耳の不自由な人、目の不自由な人、言葉の不自由な人」という言い方をしている時期もある。ものの見事にその時代、その時代に合った障害者に対するものの言い方、言葉の使い方だけが時代によって変わっている。この１００年間は障害者の価値観がどんどん変わっていく１００年ですから言葉は変わっていくんだけど、ものの考え方は見事に１００年間変わらないで今日を迎えたわけです。やっと中身も問題ではないかということで見直し作業が始まったというのが現代です。見直し作業が始まって、皆さんはちょっとだけ安心してもらったと思うんですが、だけどね、「全く目の見えない人は車の免許証はとれません」というのがもっともらしい話と同じように、「目が見えない人、耳が聞こえない人、言葉がしゃべれない人はお医者さんになれない」という法律も皆さんの中では「そんなん、あたりまえやん、人の命を預かる仕事、全盲の人はむりやで。耳の聞こえない人は不安やな」。そういう思いがあるでしょう。ないですか？

いちいち手を挙げてもらいませんが、自分の胸に聞い

てみてください。自分の身体の具合が悪くなって飛び込んだ病院で、たまたま自分の担当のお医者さんが全く目の見えない人だったら「エッ」と思いますか。ちょっと不安になりますか。「この人わかってくれるのかな」。耳の聞こえない人に「私、手話ができない、ちょっと不安やな」。もしもそんなふうに率直に不安に思った人、その人に私がこれから言うことを覚えておいてね。それと同じ不安を、ずっと持ち続いて１００年以上持ち続けて生きている人がいる。皆さんと同じ地球上に生きている仲間の中に、そういう不安をずっと抱えて生きてきた人がいるということにちょっとだけ思いを馳せてください。どういう人か。ろうあの人ね、耳の聞こえない人、言葉が喋れない人。今、その人たちは私たちとコミュニケーションをとるのに手話で話をしてくれたり、筆談で話をしてくれたりしていますよね。その人たちが身体の具合が悪くなって病院に駆けつけるでしょう。その時、手話のわかるお医者さんていますか。ほとんどいないですよね。そしたら「自分の思いがどれだけお医者さんにわかってもらえているのかな」、その不安をずっと抱えてその人たちは生きているという事実がある。自分はチラッと

不安を感じたけど、この不安をずっと感じていた人たちがいてたんだということ、このことを、どうか忘れないでください。

次にね、実は目が見えなくったって、耳が聞こえなくったって、言葉がしゃべれなくったってお医者さんはできる。現にやっているお医者さんがいる。なぜ？法律で厳密に「医者になれない」と書かれて１００年たつのに、現実には耳の聞こえないお医者さんいてる。目の見えないお医者さんいてる、ありがたいことに。なぜ。実はお医者さんの資格をとってから目が見えなくなった人、耳が聞こえなくなった人がいるんですよね。その人はなる時には法律に抵触しなかったから、なれたんですよ。だけど厳密に言うと、今はその人たちは法律違反をやっているわけ。ビクビクしながら仕事をしてはるそうです。訴えられたら一発でアウトね。元気に働いていた頃に人間関係ができていた、病院の中で。それが耳の聞こえないお医者さんだったら、一人の人間が折角とった免許を剥奪されるような状態になるのは回りの人だって忍びない。何とかならないかと考える。隣の友だちのお医者さんが手話を一生懸命覚えてくれたり、看護師さんが手話

を覚えてくれて通訳をしてくれるようになったりしながら、その人たちは辛うじて仕事を奪われなくて済んでいるお医者さんなんですね。その人が友だちと喧嘩でもして仲の悪い状態をつくっていたら落とされちゃうわけね。

●なんで、ハルウララの馬券を買うの?

こういう話を聞くと「わあ、普段の人間関係が大切なんやな。ちょっと行き違うと奪われてしまうんやな」と寒い気がする。背筋が凍りつくような感じがしたりするんですね。僕は「欠格条項をなくす」という運動もやっていまして、法律を変えるから議員さんの力を借りないといけない、悔しいことに。東京まで議員さんに会いに行かないといかんのですよ。この時も正直に言うけど腹が立つこと一杯あってね。議員さんも仕事柄、忙しいんでしょうね。私たちが電話でコンタクトをとって私たちの運動に付き合ってくれる議員さん自体がまず少ないのに「何時から何時までだったらいいです」。行く時にいっぺんに各党の議員さんにも全部会うて、ちょっとでも味方を増やしておきたい。そうでないと法律なんて変わらないからね。僕ら時間を約束してもらって行く。相手の

人が忙しいから私たちも時間を守ろうとする。大阪から東京に行って議員会館に行って一人ひとりお願いしようとしたら一人5分、１０分となってしまう。もう僕らは必死の思いで、これ以上やったら次の議員さんに遅れることになるから「よろしくお願いします」と慌ただしく次の議員さんのところに行くんですが、気を遣って一生懸命行くのに「ちょっと用事ができてしまい、お約束していたんですけど、出てしまいまして。私、秘書ですが、私が伺います」という話になってしまう。本人に聞いてもらえなかったり。やっと本人に聞いてもらうと「障害者の人たちの気持ちはようわかります。けどね、だからといって目の見えないお医者さん、耳の聞こえないお医者さんとか、そういう方に医師になってもらいたいとは私たちも思っているんですけど、だけどね。人の命を預かる仕事でしょう。特別な仕事なんですよね。障害者の人に門戸を開いたからといって医療水準を落とすわけにいかないですからね」という言葉がスルスルっと出てくるのね。つまり障害者がそういう世界に入っていったらレベルが下がると思い込んでいる人が余りにも多い。僕は「そんなことはないですよ。逆にレベルは上がります

よ」と言うんですけど「エッ」という顔をしているのね。

さあ、果たして皆さんの中に障害者が命を預かるお医者さんの世界に入っていったら医療の水準は上がるんだろうか、下がるんだろうか。正直に言って医療水準が下がるようなものだったら私たちは要求しない。だって人の命を預かる仕事ですからね。そんじょそこらのいい加減な気持ちで担える仕事ではない。それくらいわかっている。僕はね、今の場合、障害者が参加していったら医療の世界の水準は間違いなく上がると思っているね。なぜか。実はね、途中から耳の聞こえないお医者さんとか現実にはいる。そういう人の評判はどうか。ものすごい高い評判です、ほとんどが。わざわざ遠いところから「あの先生に見てほしい」と来る患者さんが圧倒的に多い。どうしてか。耳の聞こえないお医者さんだったら手話で通訳してもらわないとあかんね。どうしたって患者さんと話し合っている時間が長くいるんですよ。「はい、次、はい、次」という形で流れ作業のように扱われないのね。一人ひとりの患者さんと自分がコミュニケーションがうまくとれないことがわかっているから、ちょっとでも聞き漏らさないようにしよう。ちょっとでも丁寧に

わかってもらおうとするから時間をかけるわけね。経済的な面でどうかということは片方にあるんでしょうけど、とりあえず、一人の患者さんと時間をかけて話ができるということは、お医者さんと患者さんの原則やないですか。今のように流れ作業で終わっていいんですか。皆さんは健常者と言われる立場にいるから、逆に被害者になっているわけよ。ところがそこへね、テンポの合わない、スピードの合わない障害者のお医者さんが一人できることによって、どれだけ皆がホッとできるか。そのお医者さんにかかった患者さんが、どれだけその先生に診てほしいと思うか。その気持ちはわかるでしょう。そうなっていくんや。

これがね、人間の不思議なところなんです。若い皆さんはね、「もっとドライにものを考えないといかん」と言うかもしれない。「経済効率が悪かったらそんなこといったってあかんやないですか」。何でもかんでも数字に置き換えることが皆さんの中では癖になっているかもしれない。だけど、もしも本当にそれでドライに割り切れるんだったらね、ハルウララになんであれだけたくさん行ったわけ？　１００何戦負け続けている馬にどうし

てあれだけ人気が出るわけ。そうよ、人間って、そういう感情を皆、持っているんですよ。それが人間らしいということなのね。皆、あんなニュース聞いたらホッとするやん。その他のニュースは殺伐としていてさ。「ああ、もう嫌やなあ、なんでこんな社会になってしもうたんや」というニュースばっかりでしょ、この頃。小学生がわけもわからず誘拐されたり、傷つけられたり、殺されてしまったりしていることが頻繁に起こっているような社会。何かが違ってしまったんやな。そんな社会の中でね、負け続けている馬にね、何か魅力を感じて、負けるんわかってて、その馬券を買いにいきたいような心理、そういう心理も実は私たち人間すべて持っているんだということ。人間ってそういうふうに不思議でわけのわからない部分、一杯持っているなと思うんですね。

●ときどき月から地球を眺めてね

僕ね、最後にこんな考え方を皆さんにいっぺんしてみてほしいなと思うんです。時々でいいですから、自分の心をお月さんくらいに飛ばしてくれます？　お月さんから地球を見てください。地球はどんな形をしていて、ど

ういうものなのかというのは、いいことか悪いことかわかりませんけど、とにかくお月さんまで人間は行っちゃった。そこから写真を撮った。宇宙から見た地球の姿は写真で見たと思う。そういう姿をしている。「地球は青かった」という言葉があるように、青い星があって、雲が巻いている。もちろんいつも同じ姿をしているわけではないんですが。そういう想像は難しくないですね。その地球という星にね、いろんな生き物が生きている。人間に限ったって今、６３億の人間が地球上に生きている。私たちは生き物でしょう。二度と同じ状態の時はないんですね。障害者であろうが、なかろうが。皆さんも今、僕の話を聞いてくれている瞬間という時はあっても、そういう身体の状態はあっても、１時間たったらまた違う状態になっている。１秒１秒違う変化をしている。それが生き物なんですね。そしたらいつも変化をしている生き物が６３億いて、生き物というと、もっと一杯いる。それがいつも変化している。そしたら目が見えなくなった人がおったって、耳が聞こえなくなった人がおったって、足がなくなった人がおったって、精神的に時に自分を制御できなくなる人がおったって、あたりまえでしょう。

何の不思議もないね。つまりこの社会の中に障害者と言われている人が皆さんの隣におったって何の不思議もないんです。それは生き物であるということの証拠なんです。ところがどうして障害者問題が特別な問題に見えてしまうんでしょうね。

それは悲しいことに人間というのは、自分を中心にしてものを見ることしかできないからです。障害者の問題が特別な問題に見えてしまうのね。だから時々でいいです。自分中心にものを見てしまうのは仕方がない。僕だって偉そうなことは言えない。僕だって自分中心にものを見て考えている。自分をちょっとでも客観的にと思うけど、難しい。だけど僕は時々、お月さんに自分を飛ばす。お月さんから地球を見てみる。そしたら少しは客観的な自分になれるんですね。自分中心にみる見方と、自分を６３億の一人として見る時の自分、どうかこの二つの見方、最低限この二つの見方があるんだということを感じとってもらえたらありがたいなと思います。わかったようなわからん話を訥々とやりましたけれども終わりたいと思います。特に聞きたいな、あんだけしゃべりよって、あの発言はちょっと確認しておかんと嫌やなということ

があったら手を挙げてみてください。特にないですか。

障害者が特別な人間と思われている間は、障害者を福祉や道徳の範疇で考えているということでしょう。本当に障害者を一人の人間として全く自分と変わらない人格を持っている、人権を持っている人なんだと考えることができたら、僕はその時から障害者問題とか障害者差別とかということがなくなって、本当に人間が解放されていくのではないのかなと思います。これは一般論と違うから参考に聞いてください。私が長い間、障害者運動をやってきてね、障害者って何だろう、障害者ってどんな人のことかなと考えてきて、こんな結論を持ちました。障害者というのは身体つきや精神のありようの問題ではなくて、つまり一人の人間の身体つきや精神のありようの問題ではなくて「一人の人間が一生懸命に生きようと思っているのに、その生き方の足を引っ張られたり、前から壁がつくられてしまって邪魔をされたりして、それ以上前へ進めなくて死ぬ思いをしているような人」。厳密に言うと、もう死んだ方がマシかなというところまで追い詰められているような立場にいる人、それが本当の障害者と私は思っています。足がなかろうが、目が見え

なかろうが、そんなことは障害者とは本当は関係ない話やと私は思っているのね。そうじゃなくて、一人の人間が死ぬ思いをしているような状態、そういう立場にいる人を私は障害者と考えていて、そういう人を一人もつくらないのが、私がずっとやっている障害者運動ではないかという結論づけをしています。見かけではない、ありようの問題なんだ。一人の人間がどう生きたがっていて、その生き方が、なんで邪魔をされたり足を引っ張られたりするのかという、足を引っ張ったり邪魔をしたりするものを取り除いていくのが障害者解放運動ではないのかなと私は思っています。

はい、どうぞ。「障害者運動をまだ考えたことがない。だけど障害者が資格がとれないことだっていいじゃないか。バリアがなくなればなるほど競争の社会に入っていく。仕事につけても大変で、目の見えないだけでハンディがあるから、そんな大変な世界にわざわざ入っていかなくてもいい」。そうじゃなくて？　「憧れの仕事に就けたのはいいけど」。本当はね、僕も競争社会は好きじゃないけど、温室はよけい好きではない。人間で生きていく以上仕方がないわな。あなたは競争が嫌なわけ？

「嫌じゃないけど、一人の人間がやれる範囲が限られている。むりなことを要求しないでほしいという思いがあるということ？」　よかったらな、ここまで出てきて対話してくれたら、ありがたいけど。僕の意見、立派なん？

立派な意見でないと人前でしゃべられへんという考え方はせんといてくれる。そんなん、言われたら恥ずかしくて人前でしゃべられへんやん。気持ちはごっつうようわかるんよ。わかるからもっと話したいなと。よかったらお昼ご飯一緒に食べへんかな。

私が解釈した、彼から感じ取ったものは「全盲の人が車の免許証をとれないかと、お医者さんの仕事につけないこと、それくらいのことあたりまえやから、私自身、なりたいと思ったことないから別に法律であっても構わないんじゃない」と彼は一応言っているみたい。それでいいですか？　僕から言うけど「なんで法律にわざわざせないかんの？」と言うと、どない答える？　目標にできるようなものを、法律で締め出さなくてもいいというのが僕の意見。お医者さんになりたかったら国家試験とかハードルをパスせんといかん。お医者さんになれないという法律がなくなったとしたら障害者は全部お医者さ

んになるん？　そんなことないよな。国家試験を通らないといかんし、実習を受けないといかん。パスせんといかん。ただですら全盲の人がお医者さんになるのは非常に難しいんですよね。もしも難しい条件を全部クリアするようなすごい奴が現れたとしたら、そいつはお医者さんが天職やと思えるくらいの才能を持っている奴に違いない。僕が医療水準が上がると思ったのはそういうことなんですよ。本当にお医者さんに向いている人しか残れないんよな。健常者の人たちはお金でお医者さんになる奴がおるわけよ。だから医療事故が起こるんですよ。障害者は法律で締め出されなかったら本当にそれが向いているような人しかお医者さんになれないわけ。そういう人がお医者さんになったら私は医療界は新しい世界に入るやろな、本当に大事なお医者さんが現れるやろなと思えるんね。そんなことで話をしました。長い間、ありがとうございました。これで終わります。

司会　牧口先生、どうもありがとうございました。諸君は福祉を勉強し、将来、福祉の世界に入っていかれる。そういう人生のスタートにあたって牧口先生のメインテー

マである「違いがあることはすばらしいことだ」という話を具体的に聞かせていただきました。目からウロコが落ちるようなお話だったと思います。このことはまた今日のミーティングの中で、皆さんで互いに深めあっていただきたいと思います。牧口先生には体調が優れないところを朝早くから諸君のために来ていただきました。最後に大きな拍手をお願いいたします。

牧口　ありがとうございました。コンディションの悪いまま来てしまって皆さんも聞きにくいところがあったと思いますが、どうもありがとうございました。名前は忘れてもらってもいいから、この姿を覚えておいてください。どこかで出会ったら「おっ、お前の話、聞いたで」と声かけてください。急いでいる時はあきませんけど、ちょっとでもゆとりのある時は喫茶店にいってコーヒーとケーキくらい御馳走します。またどこかで会いましょう。さいなら、終わります。

あ と が き

この度、関西の障害者運動の指導的立場におられる牧口一二、河野秀忠の両先生が新入生にご講演下さったことは、私たちの深く喜びとするところです。また、このような得難い企画の実現にご尽力頂いた本学人権教育研究センターの八木所長に御礼申し上げます。

お二人のご講演内容は「別に立ち、共に撃つ」という表現がぴったりでありますが、障害者問題に対するスタンスは、境遇や体験の違いこそあれ、まったく同一地平線上にあります。一つは、障害によって難渋する人びとを「障害者」としてカッコに括るのではなく、一個の人格の持ち主であるAさん、Bさんとして受け止める、というごく当たり前の感性を持つことの大切さであります。他は、社会の動きのなかにある「排除の論理」に対して意識的であること、敏感であることです。昔、私の卒業式で物理学者の渡瀬譲学長は、「人間の尊厳を犯すものは、外にあるものではなく、内にあるものである」という言葉をはなむけにいたしました。新入生である諸君にも当てはまる言葉でしょう。

ご両所は、重い問題を軽いさわやかな口調で語るという作風に長けておられるので、私たちは何気なく聞き流してしまいそうですが、折に触れ、この講演録を繰り返して読んで頂けたらと思います。

２００４年4月4日

花園大学社会福祉学部長

林　　信　明